

PAWEL ACOUSTICS Elektra

サイズは本体部分だけなら高さ約40cmほどの小型機。これが付属の専用スタンドにネジ止めされている。小型のわりには分厚い板材で、叩く

とコツコツと引き締まったいい響きがある。付属スタンドも同様の木製でがっちりした造りだ。そこで前面のグリルを外すと、ご覧のような目玉パター

ン。トゥイーター周りの楕円形部分はフェルト状で反射対策と思うが、その目玉が真ん中でなくわずかに片寄っているのが可笑しい。

しかもこのパターンはL/R対称で、セッティング時はロンバリ風ではなく、目玉を内側にした寄り目風で鳴らせとある。とするとこれは、リアルな空間感を再現でもする独自のノウハウなのかとも思ったが、それ

にしてもグリルを外したままでは、何だか見詰められているようで落ち着かない。もしやこれは、グリルを外さずに使えとの意味かと思ったりもした。だから寄り目風にしてグリルを付けたまま鳴らした。いつも最初に聴くジャズヴォーカルのローズマリー・クルーニーだ。その再生がじつし。常にほど気



パウエル・アコースティクス Elektra

¥1,680,000 (ペア)

●型式:2ウェイ2スピーカー・パッシヴラジエーター付き●使用ユニット:ウーファー・12.7cmコーン型、トゥイーター・1.9cmドーム型、パッシヴラジエーター・18cmコーン型●クロソーパー周波数:2.2kHz●感度:90dB/2.83V/m●インピーダンス:4Ω●寸法/重量:W400×H1,060×D400mm/26kg(スタンド含む)●備考:専用スタンド付属●問合せ先:ステラヴォックスジャパン(株)☎03(3958)9333

エキサイティングコンポーネント
EXCITING

COMPONENTS

スピーカー本体のフロント・バッフル面と、スタンド面とは傾斜角が微妙に異なる。スタンドと本体は2本のネジで結合されており、スピーカー本体の底面にはゴムのインシュレーターが取り付けられている。



バッフル面は板厚22mmの積層材を用いられている。トゥイーターには、トランジェントと周波数特性を向上させるため、シルク振動板の表面に金属コーティングを施した1.9cmソフトドーム型を搭載。ウーファーはスキャンスピーク製12.7cmコーン型ユニットをベースとしたもので、振動板の強度をあげるなど、独自のチューンナップが施されている。



振動板にポリプロピレン系の素材を用い、ラバーエッジを採用した18cm口径のバスツラジエーターを背面に搭載。その下にはシングルワイアリング対応のスピーカーターミナルが設けられている。

にするその声は、程よい陰影を湛えた佇まいと柔軟な人肌の感触を伝える官能美。もちろん色気もあるし味も濃い。バックバンドの演奏も、ブラスはコテツと脂っこい艶だし、シンバルは粒立ちよく拡がる。

たまらなくなつて次々に聴いた、メソソプラノのフォン・オッターは、たとえようがないほどの妖艶さとニュアンスの豊かさ。粘っこく絡まるような音の繋がりと抑揚で、熱唱する声にもウエットな肉感がある。ハーゲン四重奏団が聴かせる、シヨスタコーヴイチの激しい弦楽四重奏も絶妙。強烈に切れ込み鋭く立ち上がりながらコースレ音は甘美で、電光のようなピツツカー

ートにも指の感触が残るし、弾力性のあるチェロの胴鳴りにのつてうねるハーモニ―は濃密だ。このほかにもピアノは香るような弱音の美しさやラ

イヴ感のよさや、木質の感触を湛えたまろやかだが芯のいい響き。そしてオーケストラは緻密で色彩豊かに盛り上がり、強奏のトゥツティも濁りなく漂う。

テスト気分ですら粗探的に聴けば、ローエンドなどそれほど伸びているわけではないが、音楽を聴くうえでは何ら不足を感じさせないばかりか、豊かな低音感を満喫させるのである。何か不思議なスピーカーだ。

クオリティを追求したスタジオモニター

パウエル・アコースティクスの名は知っていたが、自社ブランド製品を目にするのは初めてだ。というの

も同社は、現役のスタジオエンジニアでもあるハリ―パウエルが、スイスで80年に興した会社なのだが、これまでは、同じスイスのアンサンブル社のスピーカーを中心に、OEM生産に専念していた。そのアンサンブルとの関係が01年で終了したことから自社製品の開発に着手し、本機がその第1号なのだから、初めて目にするのも当然。よく見ると、傾斜させたフロント・バッフルに小口径ウーファーとドーム型トウイーターを配し、リアにはパッシヴラジエーターを装備した設計など、アンサンブルが96年に発売した小型機エリージアを思い出させる。

設計者がスタジオエンジニアでもあることから、同社は本機をスタジオ

モニターと位置づけている。でもそれは、例えば強力なエネルギー再生などより、もっと純粹にクオリティを追求するものとの意味と思う。このため搭載ユニットは入念にチューンナップされ、ネットワークも56個もの素子を使用という独自の回路で、①12dB/octの緩やかなカーブとともに、ユニット間のタイムアライメントも完全に揃えているとある。さらにベアマツチとしてのチューニングにも完璧を期しとあるので、この寄り目はそのためかとL/Rのスピーカーカーを入れ替え、ロンバリ風にした意地悪試聴を試したが、これは、いかに慎重に聴いても違いが聴きとれなかった。

陰影を湛えた官能美。 香るような弱音部の美しさ

柳沢功力